



case
05

多様な主体の連携事例
錦江湾奥地域（鹿児島市、垂水市、霧島市、始良市）

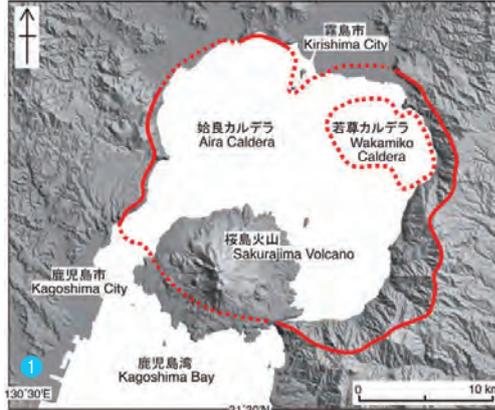
錦江湾の感動を伝える

こんなにすごい！が水でつながる

錦江湾のうち、西桜島水道を入口とする湾奥部を錦江湾奥といいます。この錦江湾奥部に面する4市（鹿児島市、垂水市、霧島市、始良市）は、環境、水産、観光、交通、防災、教育などでお互いに知恵を出し合い、協

働しています。錦江湾（鹿児島湾）は、鹿児島県の薩摩半島と大隅半島にはさまれた湾です。1964年に、それまでの霧島国立公園が霧島屋久国立公園に改称された際に、当時の錦江湾国定公園と屋久島地域が追加されました。更に、2012年に屋久島国立公園が独立した上で、新たに錦江湾奥部の始良カルデラを加えた「霧島錦江湾国立公園」が誕生しました。この錦江湾奥部には、桜島周辺の火山地形に加え、希少生物の生息地などがみられます。





この地域の魅力・特徴

- ① 始良カルデラの火山地形
- ② イルカが棲めるほど豊かな生態系
- ③ 親水性の高い渚
- ④ 希少種の生息地



働いて地域を活性化するために「錦江湾奥会議」を2011年に発足させました。

**「鹿児島は歴史だけじゃない！」
 豊かな自然は鹿児島の魅力！」**

錦江湾奥地域に数多く点在する幕末・明治維新に関する薩摩藩や西郷隆盛ゆかりの史跡には、国内外から多くの方々を訪れます。そのよ
 うな史跡のひとつとして、例えば、2015年に登録された世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」を構成する、旧集成館関連遺産群があげられます。

このように、鹿児島の地域の魅力は歴史のイメージが強いのですが、それだけではありません。鹿児島は、活火山と都市が共生している世界的にも珍しい場所です。錦江湾は、約2万9千年前の巨大噴火により大量のマグマが噴出して地面が陥没してできた窪地である「始良カルデラ」に徐々に海水が流入してできました。湾内に桜島という活火山があり、半閉鎖的な内湾でありながら水深200メートルを越える深海をもつ世界的にも珍しい湾です。

このほか、湾内や周辺には「温泉」「滝」「たぎり（海底から火山性ガス

が出る場所」など火山の恵みともいえる自然があります。

錦江湾奥には、海草の生える『藻場』やイルカの群れがみられます。また環境省レッドリストに掲載されている希少種クロツラヘラサギをはじめ、様々な野鳥も生息するなど、豊かな生態系がはぐくまれています。

錦江湾は観光資源

錦江湾周辺は独特の豊かな自然や生態系に恵まれています。その魅力や特徴は地元の方々にもまだ十分知られていません。「身近にある地域の魅力や特徴のすごさを、地元の人知らない・気付いていないために、人々の意識が地元から離れてしまっているのではないかと心配する声も聞かれます。

地元の方々が地域の魅力に気づき、魅力を発信するだけでなく、「魅力を守り、磨いていくこと」が大切です。

〜錦江湾って
 こんなにすごい〜

流域マネジメント、ここが「鍵」

「鍵」その1 恵まれた環境を活かす

錦江湾奥には、関吉の疏水溝をはじめとする、滝や湧水などの魅力的な親水スポットが多く、溶岩なぎさ遊歩道など、水を感じられる施設も整備されています。

恵まれた水辺の環境が観光資源としても活かされるには、水辺景観の整備や自然体験型観光推進（グリーン・ツーリズム、ブルー・ツーリズム）などの取組が有効です。

錦江湾奥会議を構成する市のひとつである鹿児島市では、『第3期鹿児島市観光未来戦略』において「世界から選ばれるKAGOSHIMAを目指して」として、新しい魅力作りを基本戦略のひとつとして掲げています。

そのなかに、「世界に誇れる自然と景観のブランド化」として、「世界を目指せ！桜島・錦江湾ジオパーク」「錦江湾を活かした海を体感するメニュづくり」を重点施策として掲げ、ジオパークの魅力的なプログラム・メニュー作りに取り組み、世界ジオパークの認定を目指す、海を体験できるイベントや、桜島フェリーによるクルーズの実施、等としています。



5

「鍵」その2 地域活性化に4市が連携

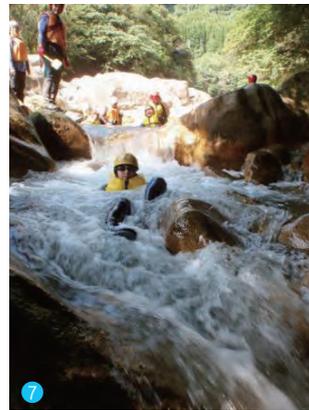
錦江湾奥会議では地域の活性化のため、環境・観光・防災・広報の4つの専門部会を設置し、環境専門部会では湾奥地域の環境美化および生態系保全の意識啓発の取組を推進しています。

錦江湾奥の流域マネジメントの新しいさは、湾を中心とした地域を包括的に取り組んでいる点にあります。

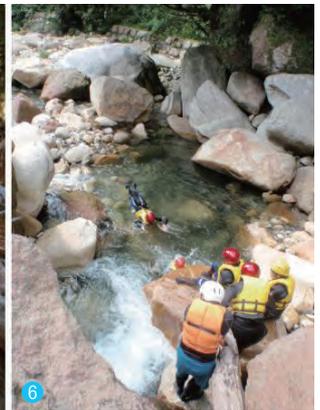
従来の流域マネジメントでは、特定の河川の流域や、盆地の周辺、あるいは特定の自治体（都道府県、市



錦江湾奥会議の組織



7



6



8

5 湧水のブランド化（豊富な湧水・地下水を、焼酎などの特産品の製造に利用（関平鉱泉所（霧島市）） 6～7 垂水市猿ヶ島深谷におけるグリーンツーリズム（自然体験アクティビティ キャンオング（沢くだり）） 8 垂水市における中高生を対象にしたブルー・ツーリズム（教育旅行 カンパチ餌やり体験）

区町村）を単位に取組が行われています。錦江湾奥会議のような、湾を中心とした地域の連携による流域マネジメントは新しい試みといえます。さて、錦江湾奥の流域マネジメントで見られる新しさには、もうひとつ、「環境・観光・防災・広報の4分野の連携」があります。

環境の改善のみに留まらず、観光資源の活用から、地域の活動の担い手となる人材の育成まで、多岐にわたる取組を連携して推進していくこととしています。

「鍵」のスタート 水循環の取組が

錦江湾会議は、今後湾奥の水質を改善するため、流域の水循環と一体となった取組を実施していくとしており、流域水循環計画の策定を目指しています。

錦江湾奥は、水の出入りが少ない海域です。大正3年（1914年）の桜島大正噴火で流れ出した溶岩により桜島と大隅半島が陸続きとなり、湾奥の入口が小さくなりました。錦江湾は、外洋の影響を受けにくく穏やかな水面を持つ一方で、湾に流れ込む河川の水質悪化の影響を受けやすい特徴があります。

つまり、湾奥部の環境を保全・維持していく方法を考えることは、湾に繋がる数多くの河川流域全体を考慮することを意味します。

流域水循環計画の策定に先立つ検討の結果、4市連携で効果的となる課題とその特徴が明らかとなりました。

これまでの取組

錦江湾奥会議では、地域の活性化のため、環境・観光・防災・広報の各専門部会を設け、取組を進めてきました。環境専門部会では、環境美化や水質及び生物多様性の保全に取り組みできました。今後、水循環の視点を取り入れることで、水辺の観光資源の活用というような分野を超えた連携を進めていきます。

1970年代前半 汚濁物質の流入が問題となる

1979～ 鹿児島県ブルー計画（水質改善等策定）

2002 溶岩なぎさ遊歩道 遊歩百選選定

2008.10 鹿児島市 かがしま環境未来館 開館

2009.2 霧島市10万本植林プロジェクトスタート

2011.8 錦江湾奥会議 発足

2012.3 霧島錦江湾国立公園 誕生

2013.9 桜島・錦江湾ジオパーク認定

2015.4 環境省 重富海岸自然ふれあい館 なぎさミュージアム 開館

2019.2 地域の関係者・NPO等との水循環に関する意見交換

継続



9 森林の適正管理の推進（適切な間伐や再造林の推進）



10 環境学習指導者の育成（かがしま環境未来館での講座風景）

この特徴を踏まえ、錦江湾奥水循環計画（素案）では、次のような基本方針を定めています。

- ① 森林等による貯留・涵養機能の維持・発揮《水源涵養域における森林の適切な整備・保全の取組の推進等》
- ② 閉鎖性海域を中心とした流域全体の水環境保全《流入する各河川および錦江湾奥沿岸域における水環境保全活動の推進》
- ③ 希少・外来生物対策による生物多様性の保全《生物多様性や希少種保全などの対策の推進および情報の共有化》
- ④ 水辺の親水性向上による観光資源の充実《流域の環境保全による観光資源の充実や錦江湾で一体となった親水空間の計画・整備による観光客の増加》
- ⑤ 次世代を担う人材の育成《次世代を担うNPO活動などの人材の育成。環境教育の充実など》

錦江湾奥流域の、ここにも「注目」

注目1 充実した教育の拠点

鹿児島市のごしま環境未来館など、環境学習の拠点が整備され、多くのNPO法人などが環境保全活動に取り組んでいます。

今後は、全国的な少子高齢化の傾向に伴う活動団体の後継者不足を解決するため、次世代を担う人材育成が必要と考えられます。かごしま環境未来館などの施設では、環境学習指導者の育成を図っています。

また、小学校における環境学習の更なる充実を図るとともに、各市の学習施設が連携することを目標としています。



11 天井につるされた“モノ”から環境負荷を考えるスペース(かごしま環境未来館)

鹿児島市 かごしま環境未来館

かごしま環境未来館は、市民や事業者が環境への関心や理解を深め、自発的な活動を促すことを目的に、様々な環境保全活動を発信しています。

具体的には、環境への関心を広く喚起し、行動につなげるようなイベントを市民や市民団体等と協働で実施しています。また、環境学習講師派遣や、リユース・リサイクル活動促進のためフリーマーケット広場の貸出を行っています。

注目2 海に親しむ魅力的な授業

環境省 重富海岸自然ふれあい館

なぎさミュージアム(始良市)

重富海岸自然ふれあい館「なぎさミュージアム」は、重富海岸を中心とした錦江湾奥部の自然環境の情報提供や、自然とのふれあいの場として2015年4月に開館しました。

錦江湾奥の成り立ちがわかるパネルや模型、干潟の生き物を観察できる水槽が展示され、錦江湾の魅力を様々な角度から知ることができます。

重富海岸では、なぎさミュージアムを拠点として自然の観察・体験等



12 霧島市10万本植林プロジェクトの様子



13 干潟の生き物観察会(重富海岸)

を行う様々な内容の学習会が開催されています。

ミュージアムの運営には、地元で自然観察講座や清掃活動に取り組んできたNPOが大きく携わっています。ゴカイなどの海の生き物の生態等を学び親しむ魅力的な授業を通じて、地域の海を知ってもらう活動を行っています。

注目3 霧島市10万本植林プロジェクト(霧島市)

錦江湾奥会議を構成する4市は広大な森林面積を有しています。その貯留・涵養機能が豊富な水をもたらす、錦江湾における水循環において重要な役割を果たしていると考えられています。

霧島市10万本植林プロジェクト(産官・民連携)では、伐採跡地などに年間1万本植樹し、10年間で10万本の植樹を目標としています。2018年までに、64,400本の照葉樹の苗が霧島市内に植林されました。

この活動に加え、錦江湾奥会議では、今後は、休耕田や非かんがい期の水田への湛水など、貯留・涵養につながる新たな取組を検討することとしています。

活動の成果

海岸ゴミの清掃と記録・分析

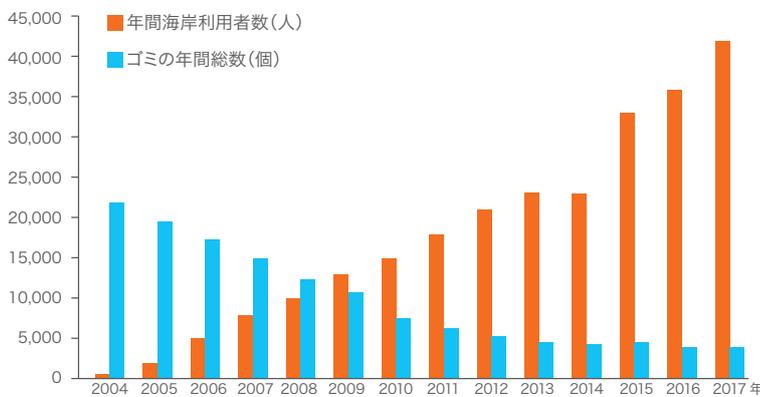
始良市の重富海岸は、白砂青松が数百メートルにも及び、干潟を通して雄大な景観を楽しむことができます。しかし、2000年代前半頃は、ゴミが多く、訪れる人も少ない場所となっていました。

故郷の誇りである重富海岸の魅力を取り戻すため、地域のNPOや自治会などが2004年から海岸の清掃活動を行ってきました。清掃の際にはただゴミを拾うだけでなく、捨てられていたゴミの内容を記録し分析しました。

ゴミの減少と利用者の増加

ゴミの内容の分析結果を踏まえ、海岸を守る活動が訪れた人の目にとまるように工夫して、清掃活動や見回りを続けました。

その結果、捨てられるゴミの量が減少すると、海岸を利用する人々も増加していきました。そして、海岸に子供達の遊ぶ姿が戻るようになりました。



2017年は2004年と比べて
利用者数は60倍、
ゴミの量は5分の1

重富海岸でのゴミの総数と海岸利用者数
(NPO法人くすの木自然館 浜本麦氏による)

Key Person



【重富海岸の魅力を伝える】

NPO法人くすの木自然館
(環境省 重富海岸自然ふれあい館
なごさミュージアム 委託管理者)

専務理事 兼 専門研究員

はまもと ばく
浜本 麦さん

略歴 2004年から15年以上にわたり、重富海岸の清掃活動を実施し、1995年に設立されたくすの木自然館(2000年からNPO法人)において、鹿児島県の自然の豊かさ、すばらしさをより多くの人に伝えるため、地域に根差した自然体験や環境教育に取り組んでいる。



自然体験や環境教育に取り組んだきっかけは？

都会に出た若者たちが再び故郷へ戻って来たいと思うような地域になればと思いました。活動を通して「人が育ち」、地域につながりができることで、地域に人々が戻ってくるのではないかと期待しています。

活動で工夫した点・気をつけている点がありますか？

環境教育では、解りやすく伝える工夫をしています。一例を挙げると、子供達が対象の教室では、子供が興味を持ってくれる動物の話題をとりあげ、指標生物の網での採取(ガサガサ)をプログラムに入れるなどしています。車椅子の方が海に入って観察が行える環境も整えました。

また、活動にあたっては組織の枠にとらわれず、人と人との関係を大切にしたいと考えています。

今後の活動に必要な事は

水のつながりを考える視点は非常に大切な事だと思います。

錦江湾と湾内に流れ込む川(鹿児島県内の二級河川)のつながりを考える事、そして湾で取れた魚をこれからもおいしく食べていける方法を考える事は、地域の水環境をより良くしていくことにつながると考えています。

今後の取組への抱負は？

地域の魅力をさらに多くの人に伝えて生きたいと思います。2004年から取り組んでいる重富海岸の清掃活動は、地域の多くの方々や子供たちが海辺で遊び、海辺の事を考えるきっかけとしての役割を担えたいと思います。

今後も、幅広い世代の方々へ向けて自然とのふれあいの活動を続けていきたいと思っています。